

作物名：なす

病害虫名：うどんこ病（病原：*Sphaerotheca fuliginea* (Schlechtendahl)）

1 被害の特徴と診断のポイント

- はじめは表面に点々と白色のうどん粉を振りかけたようなカビを作り、しだいに葉全体に広がる。
- 主に葉に発生するが、多発生にすると果実の果梗やガクにもカビが現れる。

2 伝染源・伝染方法

- 分生子が風によって飛散し伝染する。
- 胞子は葉上で発芽し、表皮内に侵入する。10～12日の潜伏期間を経て、20～30℃、湿度50～80%でよく分生胞子を形成する。

3 発病しやすい条件

- 平均温度20℃以上で初発が見られ、気温が25～28℃で湿度が50～80%の時に発生しやすい。
- 梅雨期の少雨、夏季の曇天冷涼、初秋の低温乾燥などで発生が多くなる。また、昼夜の温度差が大きくなると発生が多くなる。
- 日照不足、多肥、整枝・剪定の遅れ等により、株が軟弱徒長や過繁茂の状態になると発生が助長される。



写真1 葉の病徴

4 防除方法

- 薬剤防除は予防散布を心がけ、発生初期の段階で重点的に防除する。
- 軟弱徒長や過繁茂にならないよう、適切な肥培管理や整枝剪定、栽培管理を行う。
- 病斑が多いと薬剤が付きにくくなるとされるので、展着剤を加用し、葉の表裏にかかるよう丁寧に散布する
- 薬剤耐性菌の発生を防ぐため、同じ系統の薬剤は連用しない。特にQol剤は単剤あるいはSDHI剤との混用、混合剤のいずれの場合も1作につき1回までが望ましい。SDHI剤も同様に1作につき1回までが望ましい。

5 出典

(1) 参考文献

- 農業総覧病害虫防除・資材編2（農文協）
- 野菜・果樹・茶におけるQol剤及びSDHI剤使用ガイドライン

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影